自然の中で
野外教育情報

2016 第3号

◆今号の特集◆
「座右の書」

平成28年2月10日発行
公益財団法人 日本教育科学研究所

「物の見方」の力を教えてくれる一冊

『希望をはこぶ人/The Noticer』/アンディ・アンドルーズ（弓場隆 訳）

小森 伸一（東京学芸大学准教授）

「物の見方が･･･」。主人公である謎の老人・ジョーンズがよく口にするこのフレーズ。

この言葉が核となって物語が綴られていきます。失敗、不安、不満、悩み、恐れがいっぱいで、人生という道で大きくつまずき生きがいをなくしている人たちの前に、ジョーンズが現れます。その道に迷っている現状（悪い状況）は、物事を狭く偏った見方をしているからだと伝えます。そして、もっと広い視野に立ってほんの少し見方を変えることで考え方は広がって解決策も見いだされ、新たな道が開かれることの気づきを与えます。絶望の淵にいる人たちに勇気と光を授け、希望の道を一歩踏み出す手助けをしていくのです。

この本を手にするきっかけは、著者の前作『バタフライエフェクト 世界を変える力』に感銘を受け、さらに本書も読んでみたいと思ったからでした。一端読み始めると関心はより深まってページは止まらず一気に読み終えました。そして、心が温かくなって少なからず大きな影響を受けました。それは今も続いています。

「物の見方」を変えたり工夫したりすることの重要性については、特に目新しいことではありません。その一方で、だからこそ多くの人がその大切さを忘れられがちなことでもあると思われます。それで、ついつい狭い了見にとらわれてすぐ近くにある可能性を見逃してしまっていることも否めません。

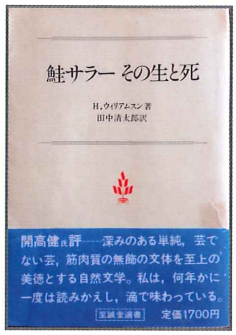
「視点（見方）が認識・思考を生み、その思考が行動を創る（そして、その行動がその見方を強化する）」といわれる循環する創成プロセスがあります。そう考えると、私たちの人生を日々創造する行動の“種”が「物の見方」となるのです。可能性を広げ、より良い人生を創っていくという好循環を得るためには、その源泉となる状況に応じた多様で最良な「物の見方」が非常に重要と考えられます。

本書は、そんな「物の見方」の力を、忘れることなく喚起してくれるものです。今では1年の節目で数回読み返し、自分自身が大切な示唆を（再）認識するための一冊となっています。

さりげなくドラマチック

『鮭サラー　その生と死』

村上 康成



H・ウィリアムスン著
田中清太郎訳（至誠堂）

開高健の評が帯に巻かれていました。

――深みのある単純、芸でない芸、筋肉質の無飾の文体を至上の美徳とする自然文学。私は、何年かに一度は読みかえし、滴で味わっている。――

自分の五感が呼び覚まされ、これはもう頭というよりも全身で味わい進める世界でした。

大西洋で育った鮭サラーは２０ポンドの立派な雄鮭となって、生まれ故郷のイギリスのブレイ川を目指し、子孫を残すために、懸命に遡っていく話です。

克明、繊細な徹底的な自然描写で、水中でのサラーの目線が描写されています。開高健の言う飾りのない文体に、芸でない芸に、圧倒されていきます。鮭サラーを取り巻く自然界を淡々と描く力に引き込まれ、泳ぐのは自分自身となっていきました。他のサケやマス、ヤツメウナギ、シャチ、カワウソ、アオサギ、キツネ、カゲロウ、そして密猟者などまでもが、その生態に基づいており、徹底的なリアリズムの中を泳ぎ、水の匂いや、流れを同じように感じて、毛穴をずっと揺さぶられていく自分がいるのです。

ぼくの拙作、デビュー作「ピンク、ぺっこん」は、この鮭サラーに出会わなかったら、生まれていませんでした。２０代半ばから、足しげく、ヤマメ・イワナ釣りに通っていました。山が、川が、生き生きと緑を吹き出し、鳥たちがさえずり、イワナやヤマメが、カゲロウに飛びつき捕食する。そのヤマメをヤマセミやカワセミが、捕らえる。そこに釣り人は餌を流したり、毛ばりを打ち込んだりして、狙った魚を釣る。

めったには釣れないだけに、手中にした時の魚体の美しさと興奮は、経験したものでないとわかりません。当時、感動を表現することの虚しさも同時に感じていました。

絵本を描きたくても描けなかった、書くものが見当たらない。絵本表現の魅力に憧れ、あれこれ試作をするも、編集者に問うまでもなく、愚作と判断できました。ただ、その時出会った編集者が、ぼくが、ヤマメに対する憧れ、取り巻く自然のドラマを夢中でしゃべるのを捕らえたのでした。「それ、それ、きっといいです。ヤマメ！村上さんのそのヤマメへの気持ち、絵本になると思います」と光明を投げてくれました。

その編集者に“鮭サラー”を読んだことありますか？是非読んでみて欲しいと促されるまま、読み終えました。無我夢中で読みました。知りました。表現の筋肉でした。ピンクの絵本を作る思いの中に、ぼくがテーマとして意識したのは“さりげなくドラマチック”でした。淡々と過ぎていく野生の中の一秒一刻の日常すべてが、ドラマであると知りました。確信したのでした。

一冊の絵本が生まれました。この作品に出会わずして、ピンクは生まれなかったし、ぼくの表現の核も生まれることはありませんでした。

惜しむらくは、この翻訳書はいま現在絶版ということです。

● 村上 康成 ［むらかみ やすなり］
絵本作家

1955年生まれ。ワイルド ライフ アートなどでも独自の世界を展開する、自然派アーティストでもある。主な作品に、『石のきもち』他多数。

育つ力を生かす

自然農法『わら一本の革命』

林 壽夫

福岡正信著（春秋社）

たぶん30年ぐらい前だったような気がします。

私は長野県木曽福島の幸沢というところの村おこしのお手伝いをしていました。山奥の集落にびっくりするほど立派な家が１０軒ぐらい点在していました。でも住民はみんな年をとってきたので半分ぐらいの人たちは山を下りてしまっていました。そこに自然村を作ろうということにしました。

「幸沢自然村」。家は多少ほころびていましたが、そのまま手を加えずに都会の人に使ってもらう。タダではなんだから一人から1,500円の環境保全協力費というものをいただくことにしました。お金は極力かけないようにして、私が所属していた東京ＹＭＣＡのリーダーたちにお願いしてボランティアで看板だけ作ってもらいました。

最初の年は知り合いがキャンプなどで使ってくれました。新聞や雑誌などにも紹介され結構人が来てくれました。人が来てくれると村のお年寄りたちも元気が出て山に戻ってきてくれました。

そんな頃、ふと立ち寄った青山の本屋で目にとまったのが『わら一本の革命』という本でした。

福岡正信さんという人が書いた自然農法の本です。幸沢自然村で自然農法ができないだろうか。後で知ったのだが、福岡正信さんという人はアジアのノーベル賞ともいわれるマグサイサイ賞を受賞しているほど立派な方でした。

それでも最初は失敗から始まったそうです。あるとき自然農法を思いつき、お父さんから譲り受けたミカン畑を、それまで剪定をして枝を落としていたミカンの木をそのままに放任したそうです。

そうしたらそのミカンの木は全部枯れてしまったそうです。そこで気づいたのは、それまで人が手を加えていたからダメだったので、最初から自然に育てなくてはいけなかったのではないかということでした。

それ以来、福岡さんの農法は徹底的に環境を自然に帰すということでした。

考え方の基本は「植物というものはそれぞれよく育つための力を備えている。その力が生かせる環境をつくれば、自分の力で育つのだ。」というものでした。

それは人間でも同じなのではないかと思いました。ほんとうは人が余計な手をかけなければ健やかな良い子が育つのではないだろうか。

いま、私はプロジェクト アドベンチャーという仕事をしていて本当にそう思っています。ただ問題なのは、これまで手を加えられて育ってきた子どもたちを、どうすれば自然に戻せるのかということでした。

ある日、私は愛媛県伊予にある福岡さんのミカン農園を訪ねてみることにしました。一体どんな人なのかを知りたいと思ったからです。そのミカン畑は福岡さんが最初に大失敗をしたというミカン園です。いま、福岡さんの農園にはアカシアの大木を中心に、大根が人の背より高く育っています。ニワトリは駆けずり回って、ミツバチはブンブン。そんな中にミカンの木があります。本来自然というものはそういうものだったのでしょう。

福岡さんに質問してみました。「幸沢自然村は標高1,100mもある寒いところです。そこでも自然農法はできるのでしょうか？」――福岡さんは優しくこう言ってくれました。「できるといえばできる、できないといえばできない。」

写真は現在売られている本です。私の持っている本は35年も前の本でした。

● 林　壽夫　［はやし としお］
プロジェクト アドベンチャー ジャパン代表

1948年生まれ。東京商船大学機関科卒。YMCAのキャンプリーダーなどを経て、1982年株式会社野外計画を設立。1987年福島県裏磐梯に教育キャンプ専用のキャンプ場として「小野川湖野外活動センター」を設立。

子どもの心もちにふれる

『育ての心』

仲本 美央

倉橋惣三著
（フレーベル館 2008）

ある日、私が保育所の１歳児クラスの子どもたちが遊んでいる保育室を訪問した時のことです。

傍らにいた男の子が「きのこ」とつぶやきながら、フェルト遊具で形を作って遊んでいます。

私が「美味しそうなきのこだね。食べてもいい?」と言いながら、美味しいという顔をして食べる真似をしました。すると、男の子は嬉しそうにどうぞという動作をし、このやりとりをしばらく繰り返していました。

その後、10分くらい経った頃でしょうか。今度は、女の子がやってきて、微笑みながら「きなこ」と私の目の前に黄色いフェルト遊具を差し出してきたのです。その言葉に一瞬困惑した私でしたが、瞬時にその女の子の心もちに触れ、「このきなこ、美味しいな。」と言いながら食べる真似をして満面の笑みを返しました。

これは、子どもたちと私の何気ないやりとりです。「きなこ」と言った女の子は、きっと男の子と私のやりとりを見て、楽しそうに見えたのでしょう。「きのこ」を「きなこ」と聞き間違えながら、この人は「きなこ」を食べて遊ぶのが楽しいのだ、私もやってあげようと思ってくれたのでしょうか。

わずか２年弱しか生きていない子どもから発せられた、優しく愛らしい心もちにふれ、嬉しくてたまらない出来事でした。

私は日頃から保育現場を訪問し、子どもたちの生活に参加しながら、実践者とともに日々の保育を振り返り、保育の質を向上するために話し合う機会をいただいています。

保育は、子ども一人ひとりの理解なくしては、適切な実践を生み出すことができないものです。私は実践者と共に話し合う立場として、深い子ども理解を持って生活に参加しようと心がけています。実践者が自らの保育に思い悩んだ際には、互いにふれあった子どもの気持ちや行動を伝えあい、共に考えるようにしています。

そうすると、子ども理解が深まり、次の保育に繋がるきっかけとなるのです。

しかし、実践者同様に、私も子ども理解に悩むことがあります。そんな時に必ず手に取る私の座右の書が、倉橋惣三の『育ての心』です。

本稿を読んでいる子どもの視座を必要とする多くの人たちは、子どもへの自らの実践に違和感を持ったり、悩んだりすることがあると思います。それは当たり前のことであり、そうあるべきだと私は考えます。

なぜなら、倉橋惣三が子どもの心もちは「極めてかすかに、極めて短い」と述べているように、その繊細な部分にふれることは容易なことではないのですから。

自らの実践に悩んだ時こそ、この本を手に取り、目の前の子どもがどのように人やモノや出来事に触れ、感じ、考え、行動をしているのかにふれようとしてみては、いかがでしょうか。

「きなこ」と遊具を差し出す子ども

● 仲本 美央［なかもと みお］
淑徳大学総合福祉学部准教授

沖縄県出身。保育士・幼稚園教諭を養成する短期大学を数校経て、現職。研究分野は、保育現場や家庭における絵本を読みあう活動や子どもの言葉。

違いを調和させる知恵

『木のいのち 木のこころ』

三浦 壮一郎

西岡常一・小川三夫・塩野米松著
（新潮文庫2005）

私が初めてキャンプに参加したのは小学４年生の夏休みでした。トウモロコシ畑で笑いながら熱中した草とりは、人生で初めてのアルバイトでした。毎朝のウェイクアップコールは全館放送のサザンオールスターズ「みんなのうた」。最後の夜には草とりで得たお金を使ってお祭りを催し、何故か英語バージョンの東京音頭をヘトヘトになるまで踊りました。ひと夏の興奮は、原風景となり今も私の心に息づいています。

「新しい体験ができること」と「出会いに溢れていること」が、私の考えるキャンプのエッセンスです。私はキャンプを指導する立場になって約20年が経ちますが、いつもこの二つの要素を備えた「場」の設定について考え続けてきました。

５年ほど前に出会った『木のいのち 木のこころ』は、私にとって一生の座右の書となることでしょう。代々、法隆寺を守ってきた一流の宮大工さんが、いにしえの口伝を交えながら仕事に対する価値観を語っており、それがまるで今日の私の仕事ぶりを見ていたかのように、身近に響いてきます。

「人は木の一本一本と同じようにそれぞれが違いますのや。木は立っているときも違いますが、材にしても違いますのやで。日ごろは個性ということをやかましゅう言うくせに、一番大事な教育ということになりましたら、このことを忘れてしまいますのや。教育といいましたら、本当は個性を伸ばしてやることと違いますか。それを今は網の目を通してみんな同じものにしようとしてますやろ。そりゃ、育てるほうは、そのほうが楽ですわな。みんな同じに扱えばいいんですから。ですけどそれじゃ個性は伸ばすことはできませんわな。一番個性を無視したやり方でんな。」

「不ぞろいながら調和が取れてますのや。すべてを規格品で、みんな同じものが並んでもこの美しさはできませんで。不揃いやからいいんです。人間も同じです。自然には一つとして同じものがないんですから、それを調和させていくのがわれわれの知恵です。」

2013年秋から、私は所属する法人の中で異動になりホテルマンを養成する専門学校に勤務しています。これまではどちらかというと個性を伸ばすことに比重を置いていたキャンプという現場から、まず社会へ適応することや型を教えることが多い現場に移りました。キャンプも職能訓練も、教育的な働きかけという意味では同質です。

そこに共通する大切なものは何かと考える時、ヒントになったのは『木のいのち 木のこころ』の言葉であり、私が以前勤務していた米国Frost Valley YMCAのコアバリューの中にある、Diversity（多様性）とInclusiveness（受容すること）でした。個性と社会性を両立する価値観であり、個が社会の中で活かされ、やがて社会（全体）を支える存在となることを示しています。

小学４年生の夏のひと時は、確かに誰かの熱い思いとアイデアに溢れていました。法隆寺1000年の歴史には遠く及ばないほんの30年前の話ですが、私は今になって当時のキャンプ指導者の熱意と工夫とを、感じとることができます。教育、伝統、伝承、これらは今を生きる人々が精一杯の知恵と誠実さをもって仕事をすることから、自ずと後世に伝わっていくもののことなのかもしれません。

私は人が出会い新鮮な体験のできるキャンプの価値を、いつまでも真剣に誠実に、そして楽しく考えつづけたいと思います。

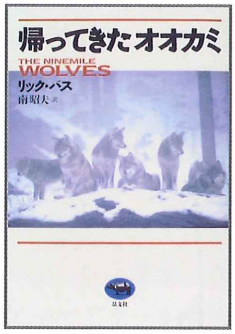
● 三浦 壮一郎［みうら そういちろう］
公益財団法人 東京YMCA

1978年、静岡県生まれ。YMCAの少年長期キャンプ「野尻学荘」に17年連続で関わる。日本アウトワードバウンド協会の野外教育指導者養成プログラムJALT(2002)、Winter JALT(2003)修了。2007年、東京YMCAに入職。2009年春より4年半、米国NY州にて東京-Frost Valley YMCAパートナーシップに勤務。

私の運命を変えた本

『帰ってきたオオカミ』

桜井　良



リック・バス著
（南昭夫訳：晶文社）

中学１年生の頃、近所の小さな本屋でこの本を見つけ、親に頼んで買ってもらったことを覚えています。小さい頃から野生動物が好きで、図書館に行っては動物の本を読んでいましたが、「買いたい」と思ったのは本書が初めてだった気がします。著者はアメリカの作家（アウトドア・ライター）のリック・バスで、1997年に出版されました。

内容は、アメリカ、モンタナ州の小さな村にカナダから国境を越えて戻ってきた野生のオオカミをめぐる人々の対立や葛藤などを描いたノンフィクションのドラマです。北米大陸全域に広く生息していたオオカミは、アメリカでは家畜を襲う害獣として17世紀頃から駆逐され、1950年代には国内の大半の州で絶滅しました。

本書の舞台となったカナダとの国境付近に位置するマリオン村では、1989年に実に60年ぶりにオオカミが姿を見せたものの、彼らを待ち受けていたのは、牛の被害におびえ徹底的にオオカミを排除しようとする牧場主、オオカミの帰還を手放しで歓迎する動物愛護団体、粛々と時に強引にオオカミの管理を進める連邦政府、そして群れを守ろうと情熱を傾ける動物学者など。様々な人々の思惑が交錯する中、オオカミの家族１頭は牧場主に射殺され、残り４頭（母オオカミ、子オオカミ２頭、老齢のオオカミ）は、連邦政府により捕獲され、カナダとの国境に位置する国立公園に放たれます。

しかし、新しい環境では子オオカミは生きてゆけず、２頭とも餓死、老齢のオオカミは牧場の近くで住民に射殺されるという悲惨な結果に終わってしまいます。母オオカミのみ、生きながらえ、別のオスオオカミと出会い、新たな家族を育みますが、彼らも人間との軋轢の中で、やはり過酷な運命をたどることになります。オオカミをめぐる人間同士の対立など政治的な話も盛り込みながら、オオカミと人間が共存することの難しさを描いた本書を、当時中学１年の私が理解できていたとは到底思えません。しかし、子供だった私にも感じることができたのは、人間に追われ、狙撃され、群れが離散しながらも、懸命に生きようとするオオカミの美しさです。まるで「種の誇りをかけ」駆け抜けているようなオオカミの圧倒的な存在が本著では際立っています。中学１年の私は、まさにこのオオカミの圧倒的な美しさにひきこまれたのだと思います。

私のオオカミへの情熱はその後も冷めることはなく、大学3年時には、本書の舞台となったモンタナ州を訪れ、イエローストン国立公園で初めて野生のオオカミを目にすることができました。ライフワークとして、野生動物に関わる仕事をしたいと思った私は、研究者を志すようになり、アメリカのフロリダ大学大学院に留学しました。人間と野生動物との共存を目指す学問分野であるヒューマン・ディメンション（野生動物保全管理における社会的側面）を学び、現在は、大学で野生動物や自然環境の保全について学生に教えています。

『帰ってきたオオカミ』は、私が研究者を目指すきっかけとなった本であり、初めてこの本を手にした時の興奮は今でも忘れられません。私は今、この本に描かれていたような野生動物の素晴らしさ、オオカミの美しさを未来を生きる学生に伝える、という大変やりがいのある仕事に就くことができました。思い返せば私の半生そのものが「オオカミをめぐる冒険」だったような気がします。

● 桜井　良［さくらい りょう］
立命館大学政策科学部助教

1985年生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。ロータリー財団国際親善奨学生として、米国フロリダ大学大学院野生生物生態・保護学科に留学し、学際的生態学（Interdisciplinary Ecology）修士号と博士号を取得。専門は野生動物管理における社会的側面（ヒューマン・ディメンション）、環境教育のプログラム評価など。

自分の原点を思い出させてくれる本

『センス・オブ・ワンダー』

小針 望友紀

レイチェル・カーソン 著
（上遠恵子訳：新潮社）

雨が降っていると、気分が落ち込んだり、外に出るのが億劫になったりすることがありませんか。『雨=マイナス』なイメージが強いですね。

その雨の日が、ワクワクして楽しくなる世界に感じさせてくれる１冊が、レイチェル・カーソン著の『センス・オブ・ワンダー』です。

この本は、誰もが生まれながらにもっている、『センス・オブ・ワンダー』（＝神秘さや不思議さに目を見張る心）がいつまでも失われないようにと願って書かれた本です。

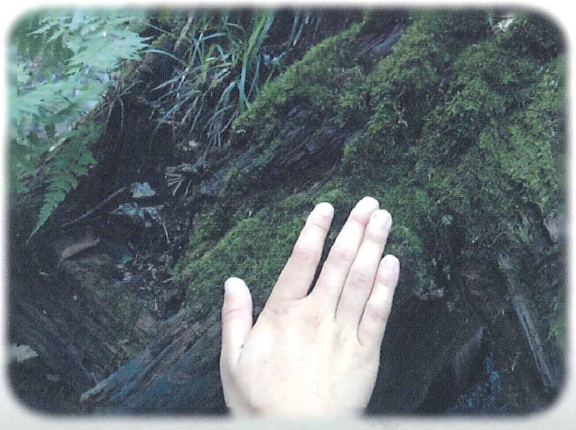
本の中でレイチェル・カーソンは、雨の日の森の魅力や楽しみについても語っています。

私は、その文章が好きで、読むと、雨の降った森に出かけていきたくなります。雨の降った森の中は、どんな景色が広がっているのだろう、植物たちは、水を含んでどんな色を見せてくれるのだろう、どんな発見があるのだろう、とワクワクしてきます。

同時に、自然体験の指導者として、雨の中での自然の魅力を伝えていきたいと思うようになりました。

野外の活動では、せっかくなら、天気は晴れの方が良いと思う人がほとんどで、実際、プログラムの実施前、晴れの予報だとホッとします。

しかし、雨だから中止にするのではなく、雨ならではの魅力も伝えていけると良いなと思います。



もちろん安全管理の上で、雨の場合は中止するという判断をする必要も時にはあります。

季節、天気、時間。どんな瞬間でも、木は木として、植物は植物として、そこにあります。その時だけに見られる最高の景色や新たな気付き、感覚を私たちに教えてくれる存在です。

雨の魅力、雨ならではの自然の楽しみを感じているからこそ、まだその世界を知らない人たちに、雨の中の自然に触れるきっかけをこれからも創っていきたいと思っています。

私のキャンプデビューも雨でした。こうして自然が好きでキャンプを続けているのは、当時の指導者の方々が、雨の中のキャンプの魅力を教えてくださったからだと思います。

『センス・オブ・ワンダー』は、自分の自然や自然体験との出逢いの原点や、自然の中で感じるワクワク感を思い出させてくれる一冊です。

● 小針 望友紀［こばり みゆき］
株式会社僕らの家 事務局

東京都豊島区生まれ。東京家政大学家政学部児童学科児童教育専攻卒業。18歳以上の大人向けに、キャンプやトレッキングなどの自然体験を企画・運営。「人とのつながり」「自然の中でのワクワクの共有」をテーマに、人と自然とをつなぐ場作りをしている。

平成27年度:アウトドアゲーム指導法講習会

赤城山麓の紅葉に囲まれて「2泊3日コース」を開催

子どもたちが「自然に触れ親しみ、自然を知り、自然に学び、自然の不思議さや美しさなどに気づく」自然体験活動の楽しい指導方法を、パッケージド・プログラム（アイオレシート）による実習を通して学ぶ、指導者講習会（29回め）を、平成27年10月10日(土)～12日(月:祝)、群馬県の国立赤城青少年交流の家で、文部科学省・日本キャンプ協会の後援で実施した。

参加者は1都1府12県から28名（男性11、女性17）。大学生のほか、社会教育や学校教育関係者、青少年健全育成等に携わる方など、20代～60代にわたった。

指導講師は、土井浩信（淑徳大学教授）、平野吉直（信州大学教授）、野口和行（慶應義塾大学体育研究所准教授）、瀧直也（淑徳大学准教授）、加々美貴代（NPO法人やまぼうし自然学校代表理事）、遠藤大和（Outdoor Planning Office ～Link～代表）の6氏。

◆講習第1日/10月10日(土)◆

開講式後、芝地の広がる多目的フィールドに移動し、まず遠藤・瀧講師の指導でアイスブレイクを行った。

次に、4グループに班分けして、5つの課題解決型ゲーム（アクティビティ）を各講師が指導した。

❶「移り木」（平野・加々美講師）
薪の上に乗り行う「ラインナップ」の新バージョン。

❷「明日に架けるハシ」（土井講師）
それぞれ1本の箸の先を使い、薪で橋を作る活動。

❸「マグネット ウォーク」（遠藤講師）
横一列となり、紐なしの8人9脚でゴールをめざす。

❹「危険物処理班」（瀧講師）
危険物入りのバケツを、別のバケツに安全に移す。

❺「お告げ」（野口講師）
吊り下げられた輪を、全員が紐で一列になりくぐる。

◎ナイトゲーム「光の音さがし」（平野講師）
ロウソクランタンを作り、二人一組で夜の森の中を、カードに書かれた音を耳をすませて探す活動。

◆講習第2日/10月11日(日)◆

ワークショップ形式による、3分野（自然体験・自然学習・創造イメージ）のアウトドアゲームを、3つの班に分かれ、午前2つ、午後1つを実習した。

1. 自然学習型ゲーム（野口・遠藤講師）

◎「もうちょっとだけよ」
2グループで活動。「窓シート」をグループに配り、興味あるものを貼り付ける。互いに交換し、窓を開けて観察し、推測したものを探してくる。

◎「名付け親」
2グループ。不思議なもの、興味深いものを探し、名前をつける。その理由を5つ短冊に書いて発表する。

2. 自然体験型ゲーム（平野・瀧講師）

◎「人間ダーツ」
2グループの競争的活動。20メートル先に的となる円が描かれ、1人ずつ目隠しをして的へ向かい歩く。

◎「モンタージュ」
2グループで活動。地面に枠を作り、各グループ1人の似顔絵をまわりの自然物だけを使って作る。

3. 創造イメージ型ゲーム（野口・加々美講師）

◎「イメージ借りもの競争」
2グループで活動。「五感カード」（視覚、嗅覚、触覚、聴覚、味覚）を引いて、カードのお題のイメージのものを自然の中から借りて（探して）くる。

◎「ネイチャー コラージュ」
2グループで活動。前の活動で借りてきたものを使い、「お題」の作品づくりをして、発表・鑑賞する。

【ゲーム創作と情報交換会】

6グループに分け、短時間で集中して創作した。提出後の情報交換会は、遠藤講師が司会し、参加者どうし、講師との懇談・情報交換の場となった。

◆講習第3日/10月12日(月:祝)◆

創作ゲームの発表会を各20分の時間で発表した。

自然体験型は「葉っぱ重ねて」

自然学習型は「この木 見～つけた！」

課題解決型は、「あ～んして。」「見えない絆」

創造イメージ型は、「つなげて つなげて へ～んしん！」「みてみて！私のおようふく」

各講師のゲーム講評の後、閉講式を行って解散した。

平成28年度アウトドアゲーム指導法講習会予告
日にち：平成28年10月8日(土) ～ 10日(月:祝)
場所：国立信州高遠青少年自然の家（長野県）

アウトドアゲーム指導法講習会

長野県峰の原高原で「1日コース」を開催

報告：鑓水 愛

昨年度よりスタートした日帰りの講習会を、今年度は1回開催しました。

菅平高原で活動しているNPO法人やまぼうし自然学校にもご協力いただき、長野県内を中心に、地域で活動している方や　インタープリターの方々にご参加いただきました。天候も良く、色とりどりの葉や実等、秋ならではの自然物を活用しながら楽しむことができました。カエルやハタネズミとの出会いもあり、終始笑顔の絶えない講習会となりました。

開催概要

日時：2015年10月16日（金）9:00～16:00
会場：長野県須坂青年の家（長野県須坂市）
参加者：8名（一般8名、男性6名、女性2名。長野県7名、新潟県1名）
講師：加々美貴代、鑓水 愛
主催：公益財団法人日本教育科学研究所
共催：NPO法人信州アウトドアプロジェクト
　　NPO法人やまぼうし自然学校

実施ゲームと活動内容

課題解決型：移り木、人間知恵の輪、一番星
自然体験型：サウンドスケッチ
自然学習型：つながり探し、もう「ちょっと」だけよ
創造イメージ型：森のレストラン～焼き魚定食～
　ミクロな世界見～つけた、スカイライトギャラリー
　カメレオンゲーム

花火!!「スカイライト ギャラリー」

参加者の声

・秋の気持ち良い天気の中で、植物をよく観察したり、表現したり、ｱｸﾃｨﾋﾞﾃｨを知ることができ非常に有意義でした。
・子どもだけでなく、大人も楽しめるｱｸﾃｨﾋﾞﾃｨを知ることができてよかったです。
・自然の中の探し物を取り入れたゲームもバリエーションが様々で、大人は大人なりに、子どもは子どもなりに楽しめるものが多かった。
・山の植物について、知っていればもちろん面白いけど、知らなくても充分楽しめるゲームばかりでとても楽しませていただきました。
・普段は植物採取禁止の場所や、針葉樹をメインとしたフィールドで活動することが多く、アレンジやルールの付け加えが必要だなと思った。

小人の乗り物？！「ミクロな世界見～つけた」

講習会を終えて

みなさんどのｱｸﾃｨﾋﾞﾃｨも純粋に楽しんでいて、いろんな感性を共有しながら、たくさんのことを感じ取っていただけた様子でした。ふだんはガイドやインタープリテーションをされている方が多く、あまりこういったｱｸﾃｨﾋﾞﾃｨを実施したことがないという事だったので、子ども達への導入や、お客さんを案内する際などに活用していただけたらと思います。

● 鑓水　愛［やりみず　あい］
NPO法人信州アウトドアプロジェクト　事務局長

瞬間を逃さず「反応」する

遠藤 大和

国立赤城青少年交流の家で行われたアウトドアゲーム指導法講習会に、講師として参加させていただきました。

この講習会との関わりは、私が自然体験活動の世界に飛び込んで間もない頃に、補助員として参加した15年以上前にさかのぼります。そして年月が経ち、今回の立場で関わらせていただいたことは、本当に感慨深いものがあります。

この講習会は「体験をすること」に重きを置いています。出会って間もない仲間と一緒に、一つのことに取り組む。試行錯誤を繰り返しながら、ゲームの創作をする。そんな3日間の中で、感じたことや得たものを、皆さんの活動に是非生かしていただきたいと願っています。

私自身も、参加者の皆さんの楽しむ姿、そしてそれぞれが抱いている想いや熱意に触れることができ、とても刺激を受けました。

私は、小学生を対象として自然体験活動の指導をすることが多いのですが、指導に際して、対象者の言葉やその動きに「反応する」ことを心掛けています。できるだけその場で、リアルタイムに反応するかしないかで、対象者の学びや気づきのレベルは、大きく変わってくると考えるからです。

ねらいを設定し、そのねらいが達成できるようなプログラムを考え実施する――これはご承知のとおり、とても大切なことです。しかし、プログラムを運営することにばかり気を取られ、対象者の言葉や表情の変化に、指導者が気づくことができない…、そんな場面を多く見かけます。

最も大切なのは対象者の学びや気づきです。そこに対しての指導者のアプローチがなければ、ただ体験しただけの時間となってしまう可能性が非常に高くなります。どんなに素晴らしいプログラムを企画しても、これでは意味がありません。

今ここで、どんなことが起こっていて、どんな変化があって、どんな言葉が発せられたのか…。それに反応することによって、対象者と指導者の間で、双方向のコミュニケーションが生まれます。このようなコミュニケーションは、活動を通じて生まれたであろう興味関心や、学びや気づきを、さらに印象深いものへと変化・発展させていく、自然体験活動にとって大切なエッセンスと考えています。

さらに、このやりとりを通じて我々指導者にも気づきが生まれ、プログラムの展開に、新たな可能性が見えてくることもあります。

どんな活動でも、人と人との関わり、コミュニケーションはとても大切です。「反応する」ことは、活動の意義や質を高めるための第一歩。どんな言葉でもいいと思います。何か変化を感じた瞬間に「おっ！」と反応できる、そんな自分であり続けたいと思っています。

そのためにはやはり、綿密な準備が必要ですね。万全の準備の上で生まれる心の余裕がなければ、「反応する」ことはちょっぴり難しくなってしまうかもしれませんから…。

遠藤講師。「反応……」は？

● 遠藤 大和 ［えんどう やまと］
Outdoor Planning Office ～Link～ 代表

武蔵丘短期大学健康生活科卒。自然体験活動の指導やコーディネート、ファシリテーターなどとして活動中。平成24年より現職。静岡県御殿場市に在住。

すべては「一期一会」

加々美 貴代

あれは去年の３月のことです。信州大学の平野先生からお電話をいただきました。「10月の連休に国立赤城青少年交流の家で開催のアウトドアゲーム指導法講習会の手伝いをお願いできませんか？」という内容でした。

突然のご相談にちょっと戸惑いましたが、スケジュールを確認しＯＫのお返事をしました。この講習会には初めての参加でしたのでどんな講習会なのか、わくわくドキドキしながらその日が来るのを待ちました。

自然（現象や景色、場所）との出遭いや、人との出会いは「一期一会」だなと、最近つくづく感じます。先日のこと、車のリヤガラスに１枚の葉っぱが目に留まりました。前日の雨が朝の冷え込みで凍って、葉っぱごと閉じ込められていたのです。朝日を受けて、それがキラキラと輝いていました。見ていると太陽の暖かさでみるみる溶けて、葉っぱはただの葉っぱに戻りました。その時に気付いたからこそ、はかなくも美しい現象に出遭えたのです。出勤時の車を降りて、事務所の入り口に向かう途中での出来事でした。

今回の講習会の講師をやらせていただけたことも、一緒に講習会を作り上げたみなさんとも、「一期一会」の機会をいただいたのです。

「この場所で、誰かと、どんなゲームをやろうか、作ろうか」と考えている時に最初の楽しみがあります。次に、「ゲームを一緒に楽しんでいる時の、誰かの顔を見る」楽しみがあります。最後に、「次は誰とどこで、いつ、何をやろうかと考えている時」に楽しみが生まれてきます。

季節や場所、人が変われば、たとえ同じ内容であっても、すべて違うゲームになるのです。まさしく「一期一会」です。だからこそ、常に四方八方にアンテナを巡らせて、見逃さないように感性も磨かなければならないと思っています。そして、一番大切なのは「好き」の気持ちがあるか、無いかだと思います。「好きこそものの上手なれ」とはよく言いあてた言葉だと感心します。

今回の講習会では、思いが通い合うみなさんと出会えたことが大きな収穫です。２泊３日という長い時間を過ごしましたが、あっという間に感じました。各地域でご活躍されているみなさんと、素敵な時間を共有できた満足感で心が満たされて、長野に帰ってきました。

心が満たされていると、ひとは笑顔でいられる。それには、打ち込めるなにかと、受け入れてもらえる空間（ひとや仲間、場所）の存在が欠かせないと思います。

参加された方から「いつもみても笑顔だった」と言われました。うれしい気持ちと、常に誰かに見られているんだと、立場としての緊張感を感じました。私が笑顔でいられたのは、好きな活動＋みなさん＋自然・森があったから。

これからも、だれかの笑顔のお手伝いができる存在でいたいと感じた３日間でした。

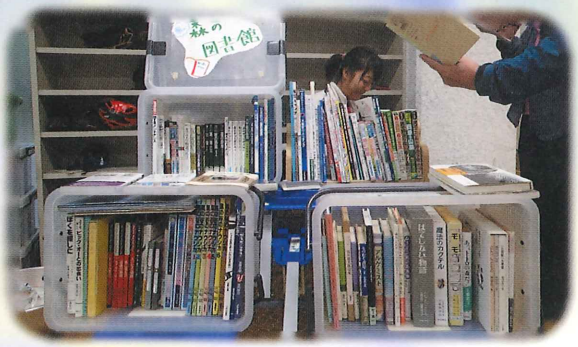
指導中も笑顔を絶やさない加々美講師（中央）

● 加々美 貴代［かがみ きよ］
NPO法人 やまぼうし自然学校代表理事

長野県安曇野市出身。山形大学農学部林学科卒業。造園会社、山小屋、産休代用理科実験助手を経て、平成14年から常勤職員、平成20年より現職。

本と出会うこと、人と出会うこと

野口 和行



私が大学生と一緒にキャンプをするときに、必ず持っていくもののひとつに、「森の図書館セット」（右の写真）と名づけているプラスチックケースがあります。その中には、私が大好きで、学生たちに読んでもらいたいと思っている本たちが詰まっています。その中で大きなスペースをとっているのが、極北の大自然とそこに生きる動物たちを撮り続けた写真家、星野道夫さんの写真エッセイ集「Michio's Northern Dream」です。

星野さんがアラスカに渡るきっかけとなったのは、大学生の頃に神田の古書店街で見つけた１冊のアラスカの写真集です。その中の１枚の写真、シシュマレフという小さな村を空撮した写真を見たことをきっかけに、実際にその村を訪れ３ヶ月間村人たちと共に生活しました。それは彼にとって強烈な体験として心に残りました。その後、彼は写真という仕事を選んでアラスカに渡り、アラスカの大地と海に生きるさまざまな動物たちをカメラに収めました。アラスカをめぐる旅の途中で、そこに生きるさまざまな人たちと出会い、ついにはアラスカに根を下ろすことを決めるのです。

本に出会うことと、人に出会うことはどこか似ているように思います。本を通じて私たちは様々な知識や情報を得たり、見知らぬ土地を旅したり、別の人生を生きることができます。私は星野さんの本と出会うことで、自然と人をつなげることの大切さを深めることができました。また、私たちはさまざまな人との出会いの中で、お互いに影響し合い、自分を高めるきっかけをつかむことができます。私は、これまで自然体験活動の現場で出会ったたくさんの人たちのおかげで、今の自分がいることに深く感謝をしています。

ただ、同じ本に出会ったからといって、同じ人に出会ったからといって、同じような結果が起きるわけではありません。むしろ１人ひとり違うと言っても過言ではありません。私はそこに１人の人間の「かけがえのなさ」があらわれているように思えます。

「結果が、最初の思惑通りにならなくても、そこで過ごした時間は確実に存在する。そして最後に意味をもつのは、結果ではなく、過ごしてしまったかけがえのないその時間である。」星野さんが残した言葉の中で大好きな言葉のひとつです。

自然の中で、人と出会い、一緒に時間を過ごす、その時間に少しでも彩りを添えられるように、また「森の図書館セット」を持って自然の中に出かけていきたいと思います。

● 野口 和行［のぐち かずゆき］

慶應義塾大学体育研究所准教授

1967年東京生まれ。東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了（野外活動・レクリエーション）。慶應義塾大学体育研究所助手を経て、2012年より現職。2009年から2011年までノースカロライナ州立大学訪問研究員。（公財）日本教育科学研究所自然体験活動推進委員。

野外教育情報　2016 第3号　　平成28(2016)年2月10日発行

発行所　公益財団法人　日本教育科学研究所

Japan Institute of Scientific Research for Education

〒104-0028 東京都中央区八重洲2丁目3－12 オンキヨー八重洲ビル

TEL. 03-3273-6552　FAX. 03-3273-6553　http//www.zaidan-kyoiku.or.jp/

印刷所　株式会社イガラシ

デザイン＝寺澤彰二

編集委員　野口和行（慶應義塾大学）、金山竜也（日本キャンプ協会）、中村［池畑］亜由美（順天堂大学）

（自然体験活動推進委員会 機関誌・情報部会）